

『大空への鎮魂』第三〇号
付録

*このページから、左のページへ

育ちゆく學鷲

熊谷飛行学校教育隊訪問記

『學鷲』陸軍特別操縦見習士官



表紙
このとき実際に入校した
能登川雅夫見習士官

冬枯れの田舎道を、登校する國民學校児童が、三々五々歩いてゐる。路傍には、二、三寸もある霜

柱がザクザクと立ってゐて、昨日今日の寒さが今更のように眼に浸み込む。満目蕭蕭（まんもくしゅうしよう）たる冬景色のある朝であつた。

熊谷飛行學校へ續く坂道をゆるゆると登って行くと、突然頭上を練習機が低くかすめて、練習機が一機すぎ去つていく、早起きの學鷲達は、今日も已（すで）に寒風を突いて飛行演習を行つてゐるのであらう。

「學鷲」は、特別操縦見習士官第一期生の入校式から学科・訓練の様子、宿舍生活などを百枚余りの写真集にしたもの。一、二枚を除き、すべて桶川教育隊での取材で、この訪問記はその一ページ。防衛省史料室にも桶川飛行学校の公式記録は滑走路の凶面しかなかったが、写真資料の多さはほかに例を見ないと思われる。入校した青木敏・元見習士官から、戦後、同期会で廻し読みした

この冊子に個々の氏名を書き込んだものが送られてきた。昭和19年8月朝日新聞社刊B5判64ページ

「上空は寒いだらうなア」と記者は同行の寫眞班と同じやうなことを考えたのである。

「だが、平氣だらう、北満やアリューシヤンを考へれば…」と口では答えたが、地上の寒さに、如何に防寒飛行服に身を固めてゐるとはいへ、高度千米に就て約七度の氣温低下と、灼熱したエンジンさへも冷す猛烈な氣流、考へたどけでも身ぶるいがするほどである。

坂を登り切ると、低い簡素な木の門柱に、熊谷陸軍飛行學校教育隊と、几帳面な楷書で書かれた門前に出る。

門衛に刺を通じてキッチンと整頓されてゐる隊長控え室に案内される。質素といふにはあまりにも見すばらしい狭い部屋である。

「遠い所をわざわざ御苦勞様です。まあ、御自由に御覧になつて



行って下さい。教育主任の〇〇中尉に案内させますから」と親切にいはれる、この隊長は、支那事變から大東亞戦争へ、歴戦の最前線の嗅ひが浸み込んだ古強者である。しかも、何か温かいものが流れ出し相手を包むでしまふやうな重厚な人格の片鱗を感じて、こゝの學生達は幸福だといふ第一印象を受けたのである。

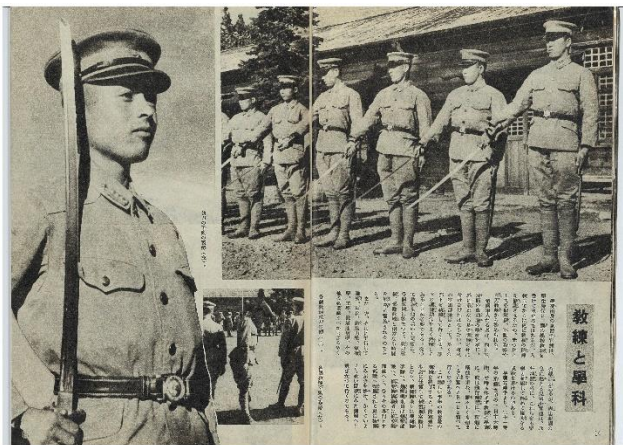
何しろ半年の超短期間に一人前の飛行將校として育て上げるので

あるから、その訓練には相當激しいものがあらうと思つてゐたので、この隊長の温顔に接して、何かほつとしたやうな気持ちになつた。これと同様な事が教育主任に接した時にも、また後で他の教官達の時にも感じられたのである。

こゝでは隊長を中心として教官も、助教も、上御一人に歸し奉つた清浄な心を持つて、前線へ送る自分の分身、自分自身の撃敵するの熱情をかたむけて、教育に献身してゐるのである。宇義通り挺身する若き學徒兵。これを教導する歴戦の教官達。この世の中にこれほど美しい世界があらうか、大空に凍てついた白雪の華のやうに天地正大の氣は粹然としてこの武藏野の一角に開いてゐるのである。これでこそこゝに學び、こゝに鍛えられる學鷲には、楠公父子の血が、時宗の血が、或ひは幕末勤皇の志士達の熱い盡忠報國の血潮が、脈々と流れ、見敵必墜、壯烈

鬼神を哭かしむる大精神が培はれるのであると思つたのである。

教育主任の案内で、廣い校内を一巡して、先ず第一に感じたことは、實によく整頓されてゐることであつた。元來軍隊の學校といふものは、何所へ行つても同じではあるが、寢室の眞新しい敷布や毛布が各自同じ巾、同じ順に、しかも高さまで同じに揃へて積み重ねられてあつたのには、精密鋭敏を極める、現代航空機を取扱ふ飛行



兵の、豪胆磊落な外見に似ず、細心潔癖な一面がこんなところに覗いてゐるやうな氣がしたのである。

學徒兵の生活は、一見習士官の手記によつてもよく窺はれる。

「〇月〇日、快晴、五時三十分、起床ラップと共に起きて半裸身となる。各寢室より先を争ふ如く、未だ眞暗な校庭に飛び出して、乾布摩擦を行ふ。曉暗の中に掛聲が四邊に響く。」よいしょ、よいしょ。よいしょ。よいしょ。と凍てついた暗闇の中に身體を摩擦する見習士官達の頭上には、蒼白い明

「執刀の不動の姿勢」と解説のついた上記写真の左。川瀬嘉紀（かわせよしのり）見習士官。数年前に実弟の充朗さんが飛行学校に見学に来られ事務局と交流が始まつた。川瀬嘉紀少尉は昭和二十年三月、このとき一緒に桶川に入校した柴崎茂少尉（川口市出身・実弟が健在）とともに、誠第十七飛行隊として石垣島から特攻出撃している。川瀬充朗著『嫡男の特攻』2015年3月（株）文芸社刊。希望者は事務局まで



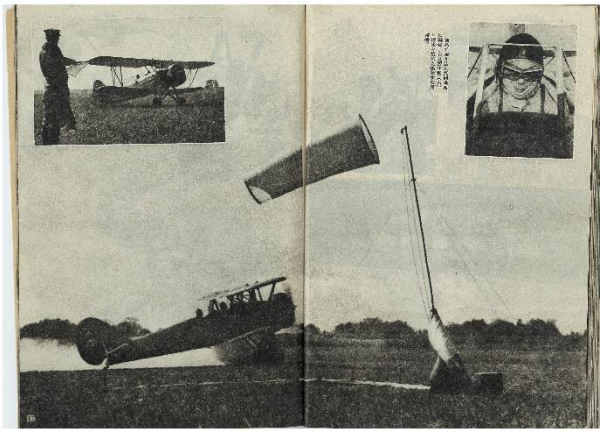
星が静かに瞬いてゐる。傍に立つて、寒さにふるへながらじつと耳を澄ましてゐる記者の胸に、潑刺たる青春の息吹きと、鬱勃たる日本魂の雄叫びが流れ込んで来るのを覚え、ふと正氣の歌などを想い出して、この純粹無垢な見習士官達に、何ともいへない心強さを感じたのである。

毎今朝點呼が引續いて行はれ、點呼が終ると寢室の内外、校庭の整頓掃除、そして洗面、楽しい朝

の食事となるのであるが、この頃になると、薄い冬の太陽の光が斜に校庭に差し込むやうになって来る。

「六時三十分集合、すぐに飛行場へと向ふ、關東平野特有の乾風もそろそろ強くなり、われらの腕前を試すが如く吹きまくる。本日の課目は特殊飛行なり、昨日からの研究果して成功するや否や、心を躍らせながら、控所に待機する。

早朝の澄み渡った紺碧の大空に



われらが黄翼はひらくと亂舞する。控所には待機する者は、唯一心に、自分の同乗すべき飛行機を監視屢する。その烈々たる督には、冷たさも寒さも微塵の陰をも與へない。自機に同乗し、冷たい大氣をついて、一氣に一千〇百米まで上昇する。眼下には關東の太平洋豁然として開け、秩父、赤城、三國の山塊陵々として指呼の間にあり。溶々たる坂東太郎は曲折して流れ遙かなる太平洋の水涯は、銀盆の如く輝く。われは飛行兵なり、われは陸驚なり、男子と生れたる喜びを今更ながら、しみじみと感じたり。助教殿より注意され、叱られながら唯一生懸命でやる。今や頭の中には他の何事もなし、課目と飛行機の姿勢のみ。」

旋回する地平線、倒立する大地、宙返り、横轉、逆轉、宙返り反轉など、訓練、訓練、訓練、息をつく暇もない猛訓練である。

地上に降り、控所に歸りても、今助教より與へられた種々の注

意を覚え書して研究する。十一時五十分課目終了、十三時三十分より學科開始、工學、戰術の講義あり、近き将来を夢見つゝ戰術を學ぶ。十六時終了、後航空体操及び運動の時間あり。十七時三十分夕食、戰友達と楽しき團欒の中に終了、入浴後自習室にて、靜肅に一日の反省及び豫習、復習を行ふ。特に明日の課目斜め宙返りの研究に、熱を入れてやる。

二十一時日夕點呼、軍人に賜はりたる勅諭奉誦。

二十一時三十分消燈、明日を樂しみつゝ毛布にくるまる。」

かうした朝夕が、月月金金、四六時中、たゆみなき緊張のもとに行はれてゐる。一日でも早く、一時間でも早く彼等の希望は前線へ、前線への唯一つである。腕を撫し、胸を張って日夜祈りつゝ猛訓練を續けてゐるのである。

二十一時三十分後の自習時間の延長、これを兵隊言葉で延燈といはれてゐるが、この延燈の許可を

願ひ出る見習士官がある。それに對しても週番士官は、適切なる理由があれば、延燈も許可するのであるが、しかし延燈を許可するといふことはお前等の睡眠時間を短くすることである。睡眠が足りないと、今日の疲勞を明日に持ち越す、従つて明日の訓練に差支へることになる。殊にわれわれ空中勤務者は過勞といふことは絶対に禁物であると諄々と諭されるのである。毎日の激烈な訓練の陰に、かうした暖かい氣持の上官達に見護られて、雄々しくも巢立つていく



家族の面会（守衛所内に面会所があった）

學鷲達なのである。

(終 原文のまま)

【解説】

「特別操縦見習士官」(通称「特操」)とは、昭和18年、陸軍航空の操縦者短期養成のために、10月以降、大学、高等専門学校など高等教育期間中の学生を繰り上げ卒業または休業させて選抜採用し、採用と同時に「見習士官」として、下士官の最上級「曹長」としての階級を与え、修業期間一年経過後に少尉に任官させる制度。2期生以降は「学徒出陣」と重なるが、桶川にはその後第2期生、3期生が入校している。第一期生は採用約二五〇〇名特操一期生集のうち、87名が18年10月1日桶川教育隊に入校した。桶川に第1期生が入校した様子は、当時のアサヒグラフに掲載され、当時の富永恭次陸軍中将の長男・靖も入校していたため、朝日新聞にも写真付きで取り上げられている。桶川では、初めて飛行機を操縦できるまでの基本教育をし、19年3月、戦闘、偵察、爆撃の分科を指定され各地の教育飛行隊に転属していった。

この記事では、機密保持のため「桶川(教育隊)」の表示はないが、写真と文章から桶川であることがわかる。取材は昭和19年2月頃で、柳井政徳元整備員や永井隆夫元見習士官は取材記者のことを記憶していた。

「教育主任」とは、伍井芳夫(いついよしお)中尉(当時)のことで、学校としてこの取材に対応した。本会会長・臼田智子氏の父で、のちに第23振武隊長として特攻出撃している。

伍井芳夫中佐の詳細は臼田智子著『特攻隊長伍井芳夫』(平成十五年七月中央公論事業出版)

*この『育ちゆく学鷲』の紹介は、本会会報「大空への鎮魂」の第15・16・17号に掲載したものに、若干の解説を加えたものです。



召集下士官操縦学生75期生(昭14)が当時の櫻井晴一隊長に贈った徽章。裏に「桶川分教場」とある。

DVD 絵はがき 販売中

『熊谷陸軍飛行学校桶川分教場の歴史を語り継ぐ』

3 編収録

- ① 「熊谷陸軍飛行学校桶川分教場」(17分5秒) CGを使い熊谷陸軍飛行学校桶川分教場の概要を
- ② 「紙芝居 海へ向かった練習機」(19分15秒) 特別攻撃隊第79振武隊が出発して九州に向かうこのエピソードを紙芝居で解説
- ③ 桶川飛行学校跡写真(2分50秒)

絵はがき8枚組



DVD 800円(別途送料200) 絵ハガキ 300円(送料込) 事務局まで(HPからのメール・電話)

「特定非営利活動法人 旧陸軍桶川飛行学校を語り継ぐ会」

2003年(平15)夏、桶川市の「平和を考える10日間」事業で地元に残る飛行学校跡が取り上げられたことをきっかけに、2005年(平17)6月、携わっていた職員を中心に設立され、歴史の調査発掘とともに飛行学校跡の一般公開と保存運動に取り組んできた。戦後住宅として使われていた市営住宅「若宮寮」から住人が退出した後の2008(平20)年春から、会員有志が建物内部の片づけを実施し、同年秋から2015(平27)年11月まで、市の許可を得て土・日を中心に建物内部を公開してきた。案内看板を設置し、建物内に資料を展示して見学者に解説をしてきたが、来場者は、休日の名簿だけでも累計2万3千人余に達した。会員は当初、当時の関係者をはじめ全国の元飛行兵やその遺族など150名を超えたが、会員の高齢化などで100名程度となっている。会員には、特攻隊機に下関まで同乗して行った柳井政徳元整備員(令和元年10月逝去)や地元出身の元少年飛行兵もおり、柳井元整備員が名付けた会報「大空への鎮魂」は2006(平18)年に創刊し、現在200部程度の発行となっている。分教場の歴史を解説したDVDや絵ハガキなども制作・販売している。

ホームページ <http://www.okegawa-hiko.org>